

兵庫県看護協会会長

## 成田 康子氏(62)



なりた・やすこ 尼崎市出身。兵庫県立看護大学院修了。塚口病院看護長、県立がんセンター副院長兼看護部長などを経て現職。

この3カ月、最前線で現場を支え続けた看護師に重圧がかかっていた。防護具が不足し、「武器を持たずに戦場に送り込まれた気分」と話す人もいた。特にマスク不足は深刻だった。

新規感染者数が落ち着いているように見えるが、発熱患者には感染者と同様の防護策を取らないと、後に検査で陽性が判明したときに濃厚接触者になってしまう。院内感染への強い警戒感が変わっていない。

いつ第2波が来るかも分からず、不足を恐れるあまり、コロナ患者を診る病棟でも依然1週間に2枚しかマスクを支給されない病院もあるようだ。不十分な防護具の中で対策を精いっぱいやっているのに、院内感染が出ると、手を抜いていたかのようには社会から強く責められるのはつらい。一方で、院内感染が起ると、大勢の職員が2週間も自宅待機になるため、勤務環境に大きな影響が出る

# マスク不足深刻、防護策急務

る。

コロナ患者を受け入れている病院の看護師が、予約していた自分の結婚式を断られたり、タクシーで乗車拒否を受けたりしている。勤務先を知っている美容院にはい菌扱いされるのを恐れて行けなくなった例もある。病院内でも、コロナ担当の看護師が、他病棟の職員から更衣室などで陰口を言われたケースもあった。

感染リスクを下げるため、コロナ患者の最期を家族がみとれなかったり、つらい患者の横で看護師が手を握ってやれなかったりする。コロナ患者以外でも、エアロゾル(微粒子)を発生させる恐れがある高濃度の酸素療法などを控える病院もある。命の尊厳を大切にする心や、寄り添ってケアする姿勢など、看護師として日頃大事にしていることとのジレンマは大きい。

防護具不足の中、自分がうつるかもしれないと考えるのと同じくらい、自分がウィルスの媒介者になるかもしれないという不安もある。重症患者を診た看護師の一人は、ホテルに泊まって勤務を続けたという。

第1波は、使命感で乗り越えた。看護師の士気を維持できるよう、防護具の潤沢な支給とともに、「危険手当」の支給を求めたい。

(聞き手・霍見真一郎)